

渡部千春著「北欧デザインを知る—ムーミンとモダニズム—」

NHK 出版 2006年1月11日刊を読む

本当に北欧デザインから学ぶべきこととは

1. 北欧デザインから学ぼうと、シンプルで、落ち着いた色合いで、天然の素材を使って、とスタイルだけの真似をするのは簡単なことだが、それは学んだことにはならない。むしろ、本当に学ぶこととは「モダニズム」の思想なのだと私は考えている。
2. モダニズムという考えが始まったのは前世紀の初頭だが、ブルジョア、知識階級など限られた人々のための装飾、美術にすぎなかった理想主義的な思想が、より公平な社会に向けて生産、複製可能な製品のデザインへと移り変わり、次第に広がりを見せ、(その技術を促したのに戦争というバックグラウンドはあれ)二つの大戦が終結し、50年代やっと多くの国の市民がモダニズムの結晶ともいうべき、「普通のもの」を手にする時代となったのである。
3. 無論北欧ではアメリカのように資源が無限にあったわけでもない。限られた資源で、より多くの人と快適な生活を享受できるか。そのモダニズムの課題を検証し、磨き、生まれてきたのが50年代、60年代のスカンジナビアンモダンと呼ばれるデザインの数々である。
4. これは何も実際の50年代、60年代の黄金期だけに限ったものではない。黄金期が終わり、ポストモダンと呼ばれた70～80年代にスカンジナビアンモダンは古くさいスタイルと見なされ、90年代に再び見直しが始まる(ノルウェーに限っては2000年代まで待たなければならないが)。
5. 黄金期のデザインと同時に、コンテンポラリーの北欧デザイン(家具、インテリア、プロダクト、テキスタイル、グラフィックを含め)が現在世界的に高く評価されているのは、50年代、60年代的なスタイルの再流行であることは否めないが、むしろそれよりもモダニズムの普遍性がさらにその範囲を広げ、根本的なデザインに対する考え方の素晴らしさが一般的に理解されたから、と見るほうが妥当だ。
6. モダニズム、という考え方は過去から継続してあり、今も北欧デザインの中に活かされている。この「続けていく行動」こそ、日本が学ぶべきことなのだと思う。

[ コメント ]

日本の1つ1つのデザインは優れていると言われているが、それが家庭など生活の場や街の景観などの全体像になると文字通り「メチャメチャ」なものとなって目の前に迫るのは何故か。欧米とりわけ北欧のデザインに対する基本的な取り組み方は、「モダニズム」を目指しながら継続性をも追求しているから、「人間性」を失うことを防いでいると私には感じられる。本書から学ぶところは大きい。

- 2009年4月2日林明夫記 -